松風
会報・第００一号

会設立からの歩みをたどる

1．講演会で風の松原の現状を

講師に米代西部森林管理所長の山下秀勝氏

五月十八日（金）、演題は「風の松原の管理経営」で講演会を開催し、参加者は三十一名、中央公民館の会場で学び合った。

講演では、国有林の管理運営は、平成十年に方向転換が行われ、公益的機能が重視されるようになったこと。更に後谷地国有林の沿革と現状。松食い虫による被害や利用者のマナー指導などについて話された。

2．黒松植林の歴史講演会

講師は能代市史編集委員長の古内龍夫氏

六月二十三日（土）、演題は「越後谷・越前屋・そして定之丞・景林砂防林に尽くした人々」、参加者二十六名、中央公民館で開催した。講演では、今から三百年ほど前から始まった砂防松の植林の歴史を詳しく解説していただいた。

能代の富裕な町人・能代給人・村の肝煎・郡方役人・木山方役人の人々が、それぞれ苦労と失敗を重ねて植林した松林が町並みを守り、現在の「風の松原」につながってきていることが理解された。それにともない、市街地に残る老齢黒松の保護も考えていく必要があると痛感させられた。

3．モデルコースの調査

植林の年代確認と林相の変化を観察

七月二十八日（土）、現場でのフィルドワークが行われ、風の松原を東から西へ横切るコースを三十三名の参加者で調査・観察した。

コースは憩いの広場から出発し、大森稲荷神社の北側を通り、防火線を横切り、港湾道路で折り返し。帰りは稲荷神社の北側を通って憩いの広場までの往復一時間三十分コースであった。場所によって異なる樹木の大きさや種類、林内の様子を多様な視点から調査できた。

黒松の太さと樹高、風による傾き、砂丘に埋もれた幹の深さ、太陽光による枝の伸び方、アカシヤなど広葉樹との激しい競合、風の通る美しい松林など林床の植物群落と共に観察できた。

4．老齢林と歴史コース調査

風の松原で江戸時代からの歴史を探訪

九月二十二日（土）、前回同様、現場でのフィルドワークが行われ小学生十一名を加えた四十四名の参加者でコースの調査・観察した。

市営陸上競技場の駐車場を出発し、野鳥の森と日和山を目指して風の松原で最も老齢である樹齢百六十年ほどの黒松林を観察した。

更に五輪塔・方角石・太平山祠から能代公園の景林神社に出る二時間のコースであった。公園では歌碑や句碑を読み、種々の広葉樹の観察もできた。公園を下ると、この付近で一番太く胸高幹周が三㍍を超える黒松があり、人々によって砂丘が踏み崩されて根あがりになった黒松もあった。小学生たちは、二グループに分かれ林床の土や植物・黒松と競合する広葉樹の様子、木や草の実などの観察にも熱心に取り組んでいた。

5．松くい虫被害調査

砂防林の間伐を行うボランティアの体験学習

九月二十六日（水）、県山本総合農林事務所主催の森林ボランティア験講習会に二十四名が参加した。

講習会は午前に男鹿市五里合浜海水浴場までマイクロバス二台で移動し、すべてが赤茶色に枯れた松林の中で、松くい虫被害の現状や被害木見分け方などを研修した。

その後、八竜町釜谷浜で被害北上防止のために県が今年度事業で取り組んだ薬剤散布の「重点防除帯」を観察し、浜辺で昼食をとった。

午後からは、能代市浅内の県保有林になっている海岸砂防林で、枯れ松や成長不良の松にテープで印を付けてから、自分たちで伐採する初めてのボランティアに心地よい汗を流した。伐採された松は口径に合わせて分類。直径七㌢を超えるものはチップとして活用し、それ以下の細い木と枝は廃棄物として処理されることになった。

役員一覧

会長	梅田市美
副会長	浅田嘉美
幹事	福司和夫
	浅野ミヤ
	石井邦彦
	梶原清治
	佐藤浩嗣
	佐藤恒雄
	金谷保
	伊藤昭子
	小山佳代子
	柴田郁
	畠山正治
	鷲尾禮次郎
監査	加藤キヌ
	浜松正次
事務局	佐藤幸雄
顧問	山本吉長
	伊藤忠夫
	近田文弘
	渡辺進
	佐藤幸雄
	小川力
	織田淳子
	布施久太郎
	田中芳夫
	安井昭彦
	田村貞美

平成十三年度の予算書

総会での話し合いにより、役員会で審議・決定しました。

収入の部

	項目	本年度予算	備考
1	会費	110,000	1,000円×110名分
2	寄付金	39,680	梅田氏・石井氏・その他
3	雑収入	320	利息等
	合計	150,000	

支出の部

	項目	本年度予算	備考
1	事務費	50,000	会場費・帳簿・ファイル等
2	通信費	40,000	郵券・封筒・印刷費等
3	事業費	50,000	研修会費・会報・ごみ袋等
4	予備費	10,000	
	合計	150,000	